

関西支部設立記念講演会

二 一 世紀の環境文化を考える

（環境文化フォーラムの意図するもの）（概要）

尾崎博明

一、環境文化フォーラム

最初に私が幹事を務めている「環境文化フォーラム」について説明します。このフォーラムは「環境の文化」ではなく、「環境と文化」について研究討論することを目的としています。一九九〇年四月に設立されました。八六年頃から大気汚染研究協会近畿支部の環境文化部会や生物影響部会、あるいは水環境学会関西支部の環境文化部会でこの種の研究討論が行われていましたが、さらに自由な討論の場を設けたいという気運が強くなり、元兵庫県公害研究所長の渡辺弘先生の発案で、このフォーラムを設立することになったわけです。

設立趣意書の概要は、次の通りです。

先ず、人間・環境系の調和について、科学と文化を併せて洞察することは、二一世紀に向かって地球規模の環境保全を志向する環境科学者の新しい課題であるという認識から広く意見の交流の場を提供したいということ。

次に環境文化の定義ですが、人間・環境系の調和の態様は慣習、期待、信条等人々の生き様の中に現れる。従って科学と併せてこれらを洞察するという考え方を環境文化という語で表現するということ。

最後にフォーラムの設立ですが、地域環境文化の荒廃は、やがて地球規模の環境破壊へと進むという観点から、科学的思考と文化的思考が互いにあい補うことを期待し、科学と文化の幅広い交流により、

二、京都の水文化

先ず京都の水について紹介します。そもそも初めて人が住んだ場所は、上賀茂扇状地と北白川扇状地です。このため京大付近は遺跡が沢山出てきます。

鴨川は、現在の堀川辺りを流れていたという説があります。ところが地下鉄工事の際に地層の調査をやりました。その結果、高野川との合流点は、もう少し南だった可能性はありますが、本流は概ね現在の場所だったようです。鴨川は、しばしば改修されています。特に右岸は、今でも整備がよくされています。鴨川は大変な暴れ川で、洪水に悩まされた歴史があります。昭和十年の大洪水は有名です。その結果、堤防の改修工事がなされました。

明治二二年の地図では、合流点付近から上流の賀茂川と高野川には水が流れていません。表流水でなく、地下水として流れていたわけです。大正十三年の地図でも概ね同じです。現在は改修されて水がとうとうと流れています。古くは特に右岸側が洪水の被害を受けました。ところで、改修によって下鴨神

環境科学者による環境保全への洞察を広く集約するために設立するということ。

設立準備世話人は、相賀一郎、池田正之、橋本道夫、渡辺弘氏等九名で、いずれも農学、医学、環境学、気象学等の部門で活躍されている方々です。

現在までの活動ですが、機関誌としてニュース・レターを二号まで出しました。それから年二回から三回の割合で講演会を開いています。

フォーラムは、地域の問題も扱いますが、グローバルな問題も強く意識しています。地球環境問題がテーマにしている九つの項目、オゾン層破壊、地球温暖化、酸性雨、有害廃棄物越境移動、海洋汚染、熱帯林の減少、野生生物種の減少、砂漠化、開発途上国の公害問題。これらの問題は、個々独立して存在するのではなく、相互に関係しています。昨年の地球サミットで随分議論されましたが、これらの諸問題がそもそも出て来た原点は何か。それを考えることも今日の課題です。この点について私見を述べたいと思います。

社辺りの水文化が壊れて来たという説があります。改修によって地下水位が下がりました。昔は下鴨神社付近には湧水が沢山ありました。それがなくなりしました。糺の森も昔に比べれば鬱蒼としたところが乏しくなっていると言われています。もう一つは、道路舗装が進んで、雨水が川に流れなくなったことがあります。いずれにしても地下水脈が途絶えてしまつて、伝統的な水文化が変わつて来ているという主張です。京都の水文化は、地下水との関連が深いわけです。湧水が沢山あって、庭園に利用されていきました。現在浅い地下水は、かなり枯れています。京都の水文化は、地下水を利用する文化だと言えます。例えば、茶の湯。庭園の水の造型、京友禅、それに伏見の酒、宇治のお茶。良いお茶は地下水でなければいけないわけです。地下水について少しふれましたが、今まで地下水について少し軽視していたのではないかと言いたかつたわけです。堤防改修の際、地下水のことを考えたかという、そうではなかつたと思います。そもそも私達は、目に見えない

地下水とか土壌のことは、あまり考えない。現在、もっと重要な問題が起つています。それは地下水汚染や土壌汚染の問題です。余談ですが、今年の十二月から水道水質基準が改定されます。化学物質は現在五万数千種類生産されています。アメリカの環境保護庁の発表では、水道水中から七百種類あまりの人工化学物質が検出されている。有機ハロゲン等沢山の有機化合物の問題が出て来ました。放置出来ない問題で、そもそも利便性追及が問われなければなりません。

三、廃棄物問題

さらに身近な問題は廃棄物問題です。埋立地を二十年計画で確保していても、十年もたないという声を自治体の関係者からよく聞きます。それほど廃棄物の量が多いわけです。持続的発展のためには便利さのある程度は犠牲にしなければなりません。京大の高月先生の調査では食べ残しが三七・五%、その内手付かずの食品が十三・九%。食料供給に対して摂取率は約三十%。豊食から飽食そして放食へ。

日本は、このような状況になっています。我々は、少しおかしいのではないか。何時までも許されるものではないとすれば、どうすればよいのか。我々自体が変わるしかない。どういうように変わるか、それが問われていると思います。環境文化フォーラムは、単にライフ・スタイルを変えるだけではなく、考え方までも変えねばならない時期に來ていると考えています。文明の究極は退廃です。退廃が進むと衰亡になります。私は、廃棄物問題では退廃の時代だと思っています。この先は衰亡です。

四、二一世紀の環境文化

生き様を変えないと衰亡に向かうかもしれないという認識が重要です。キリスト教的な考え方は捨てるべきだという意見があります。いろいろな哲学者がいつていますが、もう限界だということです。日本は、伝統文化として西洋と違うものを持っています。それに戻ったらどうかというのが基本的な考えです。人類が出現して、最初は狩猟生活、次に農耕社会。そこで富の蓄積が起ります。そして都市型社

会や国家が生れます。変革の都度我々の意識も変わります。さらに近代科学が成立します。そして産業革命、さらに現在には情報革命の時代です。その後に何が来るのか。伊藤俊太郎先生は、英知革命と言われています。二一世紀には今の考え方を捨てて変革していなければ、恐らく我々の子孫に引き継ぐ地球は無い。ここで変革をすべきだと言われています。この百年で人口は三倍、GNPは二一倍、エネルギー消費は六十倍。今後百年で人口は二倍、エネルギーは二〇三〇年までに二倍になるという予測があります。生産・消費はどんどん増えても、地球は変わらないし、変えられません。地球がもたないわけです。近代科学技術は、物質的欲望の無限追及を生み出しました。ヨーロッパ哲学は、あくまで人間中心です。人間の意志によって全ての存在するものを征服して行こうというものです。この上に立つヨーロッパの自然観を再検討しなければなりません。そして科学技術を自然との協調・調和のために使わねばなりません。我々の生き様をいかに変えて行くかが

問題なのです。

五、日本文化に戻ろう

日本文化の特徴は自然との一体化です。西洋は有の文化、日本は無の文化と言われます。性霊集にある空海の漢詩を一つ紹介します。この漢詩は、奈良の室生寺の貫首さんの書で初めて見て、感激したものです。

閑林独坐草堂曉

三宝之声聞一鳥

一鳥声有人心有

声心雲水俱了了

まさに自然との一体化を表しています。大意は、次のようなものです。

静かな林の草堂に一人座す早曉

仏法僧の声が仏の声に聞こえる

鳥の声がし、それを聞く心あり

声と心が一体になり悟りに至る

自然万物、人も鳥も何もかも如来の懷に抱かれて一体化しています。この漢詩は、そういう空海の悟

りの境地です。日本はこういう文化を持っていたのです。ここへ戻ろう。元に帰ろう。これを訴えて、私の話を終わります。

(この講演は、一九九三年六月二六日、滋賀県水環境科学館で行われた。本文は、編集部(稲場)の責任で録音テープより抄録したものである。)